

道徳教育における推進体制について
—特に家庭への啓発と授業の記録について—

足利市立南小学校 教諭 内田仁志

1 序章

本稿は道徳の授業を実践するにあたり、次の2点の効果を検証したものである。

- ・学校から発信される「道徳通信」を軸に、学校の道徳教育の情報を家庭と学校で共有すること
- ・研究授業で授業記録を詳細に取り、授業研究会の充実に役立てること

以上2点の検証は、次のような手順で行う。

(1) 「道徳通信」を軸にした家庭との道徳教育の共有について

① 「道徳通信」について

本校の研究組織は、資料開発部、授業研究部、調査連携部の3部門に分かれている。

「道徳通信」は、調査連携部が本校で行っている道徳教育の方針を家庭と共有し、信頼関係を深めるために発行している通信である。体裁はB4用紙両面刷りが基本であり、表면에学校からの道徳の方針や実践の紹介が載せられ、裏面に授業風景や児童の感想が載ることが多い。

② 「道徳通信」に内容について

「道徳通信」の内容については次の3点が挙げられる。

- ・本校の道徳の方針、またその方針を決めるにあたり現行の学習指導要領の道徳について保護者に啓発するもの
- ・実際の授業記録を紹介するもの
- ・保護者自身の意見を紹介し、道徳についての意見の交流を図るもの

本稿では実際の授業を紹介したもののみ取り上げる。

(2) 授業記録の活用について

① 授業記録について

本校は研究授業の際には全時間全発問と児童の反応の全てを文書にして保存している。その授業記録は研究会当日に行われる授業検討会において全職員に配付され、授業研究会の一助になっている。授業記録の実際については次章以下に譲る。

② 授業記録の活用について

本稿では授業記録をどのように活用すべきかを検証している。

以上、本稿は「道徳通信」による学校と家庭との連携、「授業記録」による道徳授業の改善がいかに為されたかを振り返り、効果を検証したものである。

なお「道徳通信」については上記にあるように授業記録だけではなく、研究の案内、保護者の感想、道徳の価値項目についての話なども取り上げているが、紙面の都合上、授業記録だけを取り上げる。

2 研究の実際

(1) 「道德通信」の実際

① 道德通信発行のねらい

学校と家庭が道德教育で連携するためには情報の共有が不可欠である。したがって道德通信の発行にあたっては、本校の道德の取り組みと現行の学習指導要領で道德がどのように扱われているかを保護者にも分かるような表現にして情報の共有化、啓発活動を行った。図1で発刊号を紹介する。本号で本校が道德の研究校になったこと、校長講話による本校の道德の方針について、道德の時間のねらいが明らかになっている。

【図1 道德通信・発刊号】

道德通信

発行 足利市立南小学校
道德調査連携部 No 1
発行日 平成 25 年 5 月 9 日

- 主な記事から
- 南小が道德研究校になる
- 校長先生語る「南小の道德教育について」PTA総会より
- 道德はなぜ必要か、どんなことを教えるの？
- 南小の道德教育で、めざす子どもの姿

南小が道德の研究校に

11月7日公開発表決定！！

平成24.25年度の足利市の道德教育研究指定校に南小が選ばれました。南小での道德の成果を足利市全体に発表する機会が与えられたわけです。

道德は豊かな心を育てる面からも特に最近重要視されています。学校だけでなく、ご家庭との連携が不可欠です。ご協力よろしくお願いいたします。

ご家庭の皆様にも南小の道德の取り組みを知っていただくため、このような通信を発行することにしました。発行は不定期ですがお読み下さるとうれしいです。

南小の道德の取り組みについてPTA総会で菅原校長先生より次のような話がありました。お読みいただければ幸いです。

南小がめざす子どもの姿

—各学年での成長に応じて—

責任を自覚する段階(高学年)

- ・ やりたくなくてもがまん
- ・ やりたくなくてもするべきことはする

○ 集団行動で役割を自覚し責任感が増します
○ 相手のことを考え、支え合おうとします。

反省を覚える段階(中学年)

- ・ ケンカしても仲直り「ごめんね」が言える子

○ 決まりを守ります。身近な人との協力が始まります。

しつけの段階(低学年)

- ・ いいことはいい
- ・ ダメなことはダメ！！

○ 善悪の判断を身に付ける時期です。

自分から進んでやる子

①まず教師自身子どもたちとともに考え、共感する下地を作ります。

②子どもたちにとって、どんな大人になりたいか考える機会を作ります。

③地域との連携を大事にし、学校の周りにも目を向けさせます。

④体験活動を重視します。

⑤学年に応じて「してもいいこと」と「してはいけないこと」の区別をはっきり意識させるようにします。(5月1日PTA総会より)

校長先生の講話より

道德は最近、教科になる話もあり、とても重要視されています。南小はその道德の24.25年度足利市指定、さらには文科省指定の研究校になりました。

南小で道德は次のように教えます。

道德って何を教えるの？どんなねらいがあるの？

※ インタビュー形式で説明します <(>)

<p>質問1 「そもそも道德って何を習うの？」</p> <p>答え 「道德というのは、自分や相手を大事にする心、それから自分を育ててくれた家族や周りの人々、さらには自分が生まれた国と伝統を大事にしていこう、そんな気持ちを育てるとても大事な教育なんだ」</p>	<p>質問2 「具体的にどんなことを習うの？」</p> <p>答え 「たとえば生活目標で『廊下は走らない』って決まりがあったとする。廊下を走らなければ見た目はOKだけれども、道德ではどうして走らない方がいいのか、走ったらどんな迷惑がかかるか、そこまで考えて行動を起こすような子どもになるのが目標なんだ」</p>	<p>質問3 「やるほど、言われたから守るではなくて、自分のすることを相手かどう思うか、みんなのことを考えて行動する人間を育てることが道德のねらいですね。」</p> <p>答え 「その通り。自分と相手を尊重することが一番大切だね。それから難しい言葉はよく出てくるので整理しておこう。」</p>
--	--	---

◎道德の心情…善を行うことを喜び、悪を憎む感情。人間としてよりよい生き方を志向する感情。
◎道德の判断力…それぞれの場面において善悪を判断する能力。人間としてどのように対処することが望まれるか判断する力
◎道德の実践意欲・態度…道德的価値を実現しようとする意志の働き、道德的行為への身構え

編集後記

道德といえば私の記憶にあるのは、♪口笛ふういいて、空き地へ行った。知らない子がやってきて・・・♪このメロディです。(懐かしい!!) いつの時代も道德はおもしろかった、そうりたい。この通信が少しでも南小の道德の理解の一助になれば幸いです。(文責 U)

② 道德の授業を共有する段階

本校で行っている授業を保護者にどのように伝えるかを紹介する。本稿では読者に分かりやすいように指導案から説明する。

なお指導案は紙面の都合上、筆者が大幅に割愛している。

道徳学習指導案

平成25年6月25日(火) 第2校時
4年3組40名(男子16名、女子24名)
指導者 塩沢 桃代

- 主題名 失敗しても正直に
(資料名「われた花びん」学校図書 1-(4) 正直誠実、明朗)

● 本時の指導

(1) ねらい

うそをついたり、ごまかしたりしないで正直に行動し、明るい心で生活しようとする心情を育てる。

(2) 展開

◎研究主題との関連 ◇チェックポイントより ■評価

過程	学習活動	指導上の留意点
導入	気付き 1 自分が失敗をしてしまったことに対し、嘘をついたりごまかしたりしたときのことを想起し、発表する。	・失敗をしたが正直に話せなかった体験を想起させることで、価値への方向付けをする。
展開前半	深める 2 資料「われた花びん」を読んで話し合う。 ①資料の範読を聞く。 ②花びんを割ってしまったのに、そのまま帰った時の「ぼく」の気持ちを考える。 ③真二が疑われた時の「ぼく」の気持ちを考える。 ④ 正直に話し始めた「ぼく」の気持ちを考える。	・範読をする前に、「ぼく」の気持ちになって聞くように働きかける。 ◎場面絵を用いて、場面の状況を分かりやすくしたり、主人公の気持ちを捉えやすくしたりする。 ・どうしようと迷ったが、正直に話せなかった「ぼく」の気持ちに共感させる。 ・場面絵の「ぼく」の表情や「ぼくの胸がひきさく」といった言葉からも、「ぼく」の心は葛藤していることに気づかせる。 ・ワークシートに書かせることにより、自分の考えを明確にさせる。 ◎赤白帽子を用いて自分の考えを明らかにすることで話し合いを深めたり、発表できない児童も意思表示ができるようにしたりする。 ◇一人一人の考えや思いを受容的な態度で聞き、安心して発言できるようにする。 ・授業の流れを止めず、一人一人の発言を大切に受け止めるために、全体の発言を聞いてからまとめて板書する。 ・子供たちから出た「ぼく」の気持ちを「正直に言おう」「正直に言えない」に分けて黒板に整理していく。 ■ぼくの気持ちを考えることができたか。(発言・ワークシート) ・勇気を出し正直に言えたときの気持ちを考えさせ、価値に迫る。
展開後	見つけ 3 自分をふり返る。	◇ワークシートに記入する際に、個別に助言し、一人一人が安心してふり返ることができるようにする。 ■正直に行動することで、明るい心で生活ができることを理解できたか。

段	る	(発言・ワークシート)
終	生	・失敗は誰にでもあるが、それを正直に話して前向きに明るく生活しよう
末	か	とする意欲をもたせる。

以上の授業を道徳通信でどのように紹介したかを実際の通信を用いて述べる。

【図2 道徳通信 No3 4年3組研究授業特集号】

道徳通信

正直に言えますか？

発行 足利市立南小学校
 道徳調査連絡部 No.3
 発行日 平成 25年7月2日

● 主な記事から
 ○ 4年3組道徳紙上再現！！
 「正直に言えますか？」
 ご家庭の方もぜひ考えて下さい。
 ○ 教材文は「われた花びん」
 ○ 実際の授業では・・・
 正直に言える子に育ってほしいな・・・

実際の授業の様子です！！

4年3組で研究授業行われる！！

塩沢先生語る！！

25日、4年3組塩沢学級において道徳の研究授業が行われました。当日は南小の全職員と足利市教育委員会、栃木県教育



今回の授業ではうそをついたり、ごまかしたりしないで正直に行動し明るい心で生活する心を育てることがねらいです。自分の心の弱さに負けないで、勇気をもって正直に行動できる子に育ってほしいですね！！

委員会の先生も来るなど、盛況を極めました。紙上で塩沢学級の子どもの様子をお伝えします。

【われた花びん】

※ 当日、使用された資料です。おうちの方も読んでみて、一緒に考えてください！！

主人公の「ぼく」は学校帰りに教室を出ようとしたときに、誤って花びんにぶつかり花びんを割ってしまいました。その花びんは先生が大切にしている花びんでした。ぼくはどうしようか迷いましたが、教室にだれもいなかったのでものまま帰ってしまいます。

翌朝、教室に入ると割れた花びんの周りに友だちが群がって騒ぎになっています。その様子を見ていたぼくはだんだん胸が苦しくなってきました。

朝の会が始まりました。先生が「あの花びんはだれが割ったのですか？」その問いかけに答える人は当然ながら誰もいません。ぼくも答えることはできません。そんな中、昨日みんなが帰った後に、真二くんという男の子が「忘れ物をした」と言って教室に入ったことが分かります。当然、クラスの子は一斉に真二くんを疑います。疑われた真二くんは顔を真っ赤にして「ぼくじゃない」と叫びます。しかし、クラスの子は真二くんだと決めつけ、「本当のことを言っちゃえよ。」と騒ぎ立てます。

その時、「ちがう！真二じゃないんだ。」
 ぼくは思わずすかさず音を立てて立ち上がっていました。

ポイントはココ！！

○ 学校帰りに花びんを割ってしまいました。でもぼくは黙って帰ってしまいました。さあ、その時のぼくの気持ちは・・・？

○ 朝の会、最初ぼくは黙っています。朝の会の時、ぼくはどんなことを思っていたのでしょうか？

○ ぼくのせいで真二くんが疑われています。ぼくはどんな気持ちでいるのでしょうか？

○ 最後にぼくは正直に言うことを決心します。正直に話すことで、ぼくはどんな気持ちになったのでしょうか？

○ 今までに何か失敗しても正直に言えたことはありますか？また正直に言うときどんな気持ちになるのでしょうか？

◆ 今回の授業のクライマックスは真二くんが疑われて「ぼくじゃない！！」と必死に言っているときのぼくの気持ちです。ぼくの心は

● ぼくが割ったことを正直に言おう

○ このまま黙ってしよう

という、2つの心が振り子のように揺れ動いています。「さあ、ぼくはどんな気持ちでしょう？正直に言いますか、それとも黙っていますか。」
 教室の子どもの反応は2つに分かれました。それぞれの理由を紹介しましょう。

● 「正直に言う」 その理由は・・・
 「本当はぼくがやった。真二くんのせいにしては悪い・・・。正直に言ったらみんなも許してくれるだろう。」
 「話がどんどん大げさになっちゃった。今、言おう。」
 「これ以上、いやな気持ちをしたくない。」
 などの意見が出されました。

○ 「黙ってしよう」 その理由は・・・
 「ばれていないからいい。みんなに知られたくないし」「このままにしておけば、ぼくのせいにはならない。」

最終的に資料ではぼくは立ち上がって、正直に言うことを決心します。正直に言うか、言わないか、葛藤を続けて最後には正直に言えたぼくの姿・・・。こんなに重い舞台設定ではなくても日常生活の中でも正直に言えたこと、言えなかったこと、ありませんか？今回の授業では「週中は素直に認め、正直に明るい心で元気よく生活しよう」ということをねらいました。

どの子も最後には正直に言えた経験を思い出し、言えたら「すっきりした」と感想に書いていました。素直に「ごめんなさい」と言えるような、そんな子どもに育ってほしいと思いました。

編集後記

4年3組の授業をレポートしましたが、いかがだったでしょうか？的確な指示、活発な意見、すばらしい授業を展開した塩沢先生と子どもたちに拍手(〆)(文責 U)

本道徳通信のねらいは以下の通りである。

- ・資料の要旨を載せた。これを読むことにより、家庭でもどのような道徳の資料が使われているかが明確になり、自分ならどうするか考える材料となるだろう。
- ・授業のポイントを明確に示した。そうすることにより保護者にもこの時間で何を習うのが明確に把握できる。
- ・今回、授業の工夫として敢えて主人公が葛藤する場面を取り上げた。従来、道徳は「価値注入主義」と呼ばれ、価値を教え込む授業が主流を為していた。今回、葛藤することにより主人公がより高い価値に気がつくという設定であるが、保護者にはこのような授業形態は学習体験がないと思われる。したがって実際の授業の様子として、価値の葛藤場面を特集した。

以上のような道徳通信を全家庭に配布し、本校の取り組みを紹介した。

- 4 -

次に教職員研修のために授業後の検討会で使用する授業記録を紹介する。

(2) 授業記録の実際

① 授業記録の意義

授業記録ビデオ等の映像で保存する方法と紙資料として残す方法がある。授業後の検討会では紙ベースの方が以下の点で優れている。

- ・映像では教室に一台しか設置できない。そのために全員が同じ場面を見て話し合うことになる。一方、紙資料では個々に資料が行き渡るために場面に応じた話し合いが可能である。
- ・時間が書かれているために担任の時間配分の適切さが一目瞭然となる。
- ・授業全体が俯瞰できる。場面場面ではなく、問題になっている場面が授業全体を通してどのような意味を持つのかを考えることができる。
- ・なんと言っても資料の保存である。ビデオでは学校管理となるが、紙資料であれば個人で保存し、好きなときに取り出して参照できる。

以上の利点から本校では授業記録を紙ベースの資料として残している。以下の資料は上記した4年3組授業・資料名「割れた花びん」の授業記録、教師と児童の全発言である。

授業展開全記録

9:35 授業開始

T「みなさんに思い出してほしいことがあります。なにか失敗したなあ、悪いことをしたなあ、という時に正直に言えたことはありますか？」

c「妹と朝顔の水やりの約束をしていたのに友だちと遊びに行ってしまうと、朝顔が枯れてしまった。」

c「姉の洋服を借りたのに、汚してしまった。」

他5人ほど挙手。

□以上で導入終了。

T「今日はこれの話です。(花びんを提示。さらに黒板に「割れた花びん」と板書する。)

9:37 T「資料を配ります。」(読み物資料配付。A3両面刷り。資料がきちんと印刷されているか教師が確認。)

◇教師が資料を範読。

間に場面の確認は一切挟まない。場面絵を貼りながら読み続ける。

◇提示された場面絵

- ・第1場面 主人公の「ぼく」が花びんを割ってしまったところ
- ・第2場面 朝、割れた花びんの周りで女の子が騒いでいるところ
- ・第3場面 ホームルームの様子
- ・第4場面 ぼくが立ち上がった場面

□範読終了と同時にこの場面絵は一旦はがしておく。

範読終了。

9:45 T「場面絵を見ながら考えていきたいと思います。」

◇場面絵1提示 どのような場面かを確認。

T「ぼくはそのままにしたときにどんな気持ちだったのでしょうか。」

c「だれも見ていないから分からないだろう。」 c「先生に言った方がいい。」

c「だれも見ていないし、ばれたらいやだな。」

c「正直に言ったら許してくれるかな。」

c「明日、言えば許してもらえらるだろう。」

9:50 ◇教師、発言を聞いてからまとめて児童の意見を板書していく。

◇場面絵2提示 どのような場面かを確認。

T「この時にぼくは胸が苦しくなっているのかな。どんな気持ちかな？」

c「先生に言われたから。」 c「女の子の近くにいるとばれちゃう。」

c「ばれたら先生に叱られる。いやだな。」

9:52 c「割ったのは自分なのに、みんなに迷惑をかけちゃう。」

c「先生が大事にしている花びんだから悲しんでいるかな。」

◇場面絵3提示 どのような場面かを確認。

T「この時にぼくは胸が苦しくなっているね。どうしてでしょう？」

9:57 c「先生に大変な思いをさせた。ばれたら大変。」

c「ばれちゃう。みんなから嫌われる。」

c「先生に悲しい思いをさせたかな。」 c「昨日、言っておけばよかったな。」

T「昨日、しんじくんが戻ったという話が出たよね。しんじくんはなんて言ったのかな。(十分間を取って)「ぼくじゃないよ」と言ったんだよね」

10:02 ◇しんじが「ぼくじゃない」の挿絵を提示。

T「この時にぼくはどんな気持ちだったのでしょうか。ワークシートに書きましょう。」

□児童にワークシートを配る。児童個別に書く。

作業終了。

T「どんな気持ちでしょう。」(挙手10人)

c「どうしよう。」 c「本当はぼくのせいなのに悪いな。」

◇ここで2つの対極の意見が出たので、板書で2つの意見に分かる。児童にはどちらかの意見かで赤白帽子を分けてかぶるように指示。

●赤帽子

ぼくが割ったのに悪いな。正直に言おう。

○白帽子

黙ったままでいようかな。

◇それぞれの意見を聞く。

○白帽子の意見

c「ばれないからいいや」 c「しんじくんが怒られても、ぼくが怒られるよりいい。」

c 「まだ黙ったままの方がいいな。」 c 「ばれたくないから無視しよう。」

c 「だれにも見られたくないし、しんじくんのせいにしよう。」

c 「このままにしておけば、しんじくんのせいになるだろう。」

◇教師、発言を聞いてからまとめて児童の意見を板書していく。

●赤帽子の意見

c 「本当はぼくがやった。しんじくんのせいにしてはかわいそう。正直に言ったら周りも許してくれるだろう。」 → 10人ほど同じ意見。

c 「もっと話が大きくなって、いやなきもちになっちゃう。」

c 「このままだとしんじのせいになっちゃうし、ここで言えばみんなも許してくれる。」

10:15

c 「みんなに迷惑かけた。言わなくちゃ。」

c 「これ以上、いやな気持ちにさせないように。」

c 「黙ったままもいいけど、ここで言わないとまずい。」

□板書終了。意見を並立させて書く。

T 「ここでぼくは叫ぶんだよね。ぼくになったつもりで叫んでみよう。」

◇児童全員「違う、しんじじゃないんだ。」と叫ぶ。

10:20

T 「ここで正直に言おうの気持ちが勝ったんだよね。その時はどんな気持ち？」

c 「すっきりした。」 c 「辛い思いもするけど、仕方ない。」

T 「みんなも正直に言って、すっきりしたことありますか？自分をふり返ってワークシートに書いてみよう。」

◇ワークシートに書く。

発表二人。

T 「後でみんなのワークシートを見せてもらうからね。」

教師の説話を聞く。

最後に黒板に教師が今日の学習のまとめとして「正直」と板書して授業終了。

② 授業記録をふりかえって

授業記録から以下のことが明らかになる。

- ・今回の授業では時間配分が気付き 2 分、資料の説明 20 分、葛藤 13 分、振り返りと説話で 10 分となっている。本来は自己の振り返りで 15 分から 20 分程度は時間を取る所であるが、今回は葛藤場面を入れて思考を深める形式を取った。葛藤の時間が多く取られており、授業者の意図は達成できたと考える。
- ・児童の意見が多く出ている。このことから授業者の発問は適切だったことが分かる。
- ・葛藤する意見が出ていたが、どちらかがよしとはせずに授業者は意見を並列させるだけにとどめている。そして自己の振り返りにつなげている。決して価値の押しつけではなく自己を振り返り価値に到達することが分かる授業展開である。

このような意見が授業後の検討会で出された。このような振り返りが各グループでできるのも情報を共有し、しかも授業の全体像を俯瞰できる紙資料があればこそである。

3 道徳通信と授業記録の効果について

以上の実践から道徳通信と授業記録の効果は次の通りである。

(1) 道徳通信の効果

①家庭との連携

道徳通信のねらいは家庭との連携である。道徳通信により家庭にも本校の道徳の実践が図れ、道徳の意識が高まることが期待される。

②授業の記録となる

定期的な発行は記事により本校の道徳の取り組みの推移を見る指針となる。

(2) 授業記録の効果

①授業者の振り返り

全発問が網羅されており、授業者のふり返りの参考となる。

②授業記録の保存となる

紙資料の特性を生かし、授業記録を個人で保管でき、自分の授業を実践するときの参考資料となる。

③研究会での使用

授業後の検討会では紙資料の特性を生かし、グループあるいは個人で問題の場면을指摘でき、多岐にわたる話し合いが可能になる。

(3) 他の教科への波及効果として

道徳通信、授業記録とも今回は道徳に限って行った。しかし家庭に学校の学習の様子を知らせ、学校としての取り組みを保護者に理解してもらうことは道徳に限らずあらゆる教科でも必要なことである。

また、授業記録については学校全体の研究会でも必要だが、個人でも記録を取り、自分の授業をふり返ることは自己の資質向上のためにも必要なことである。

本稿では道徳の時間に限った通信と授業記録を扱ったが、本研究は各教科でも実践が必要なことである。

以上、通信と授業記録の意義を挙げ、本稿の結びとする。

評

足利市立南小学校は、文部科学省指定 平成25・26年度「特色ある道徳教育支援事業」の研究校として、『豊かな心で共に生きる子どもを育む道徳教育～児童の体験を生かす道徳資料の開発と活用～』を研究主題に掲げ、2年間にわたって研究を進めてくださいました。道徳教育推進教師や現職教育担当を中心に、学校が組織体として一体となり、全職員で授業実践をはじめとする様々な取組を行い、大きな成果を上げました。

○学校と家庭・地域社会をつなぐ『道徳通信』について

道徳教育は、学校、家庭、地域社会の三者がそれぞれの役割を果たすことによって、その充実を一層図ることができます。社会における価値観の多様化が一層進んでいるといわれる現在、道徳教育における三者の連携はますますその重要性を増しています。

本研究においては、学校と家庭・地域社会との連携を図るために道徳通信を活用してくださいました。道徳通信には、学校が進める道徳教育の方針や具体的な取組、道徳の時間の目標や内容、実践した授業についてなど、子供たちの学習や活動の様子をはじめ、南小学校の先生方の道徳教育への取組やその思いなども強く伝わってくるものでした。特に、研究授業の特集を組んだ道徳通信には、授業で扱う資料や授業のポイント、発問に対する児童の反応や葛藤の様子などが、分かりやすく丁寧に記載されており、保護者は道徳の時間の授業をイメージしながら読み進め、本時のねらいとする道徳的価値について共に考えるきっかけとなったのではないのでしょうか。また、学校が進める道徳教育や授業参観、道徳教育講演会等に関する保護者の声も紹介することで、保護者の思いや願いも共有することができました。

2年間で22号発行された道徳通信は、各号とも創意工夫がなされており、学校と家庭・地域をつなぐ大きな役割を果たし、南小学校の道徳教育推進の貴重な財産となったことと思います。

○授業記録について

本研究で行われた授業記録は、授業の中での教師と児童の全発言を網羅したものです。1時間の授業の流れや教師の発問に対する児童の反応等が時系列で詳しくまとめられ、授業者の振り返りや授業後の研究会の資料としても大変参考になるものとなっています。研究授業の際にまとめられたこれらの授業記録は、授業者の指導力の向上を高めるとともに、2年間にわたる南小学校の道徳教育の研究を支える優れた実践であったと思います。